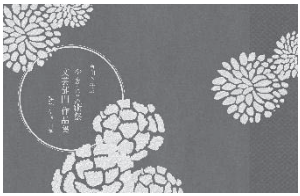
令和８年度　やまと芸術祭　文芸部門

作品集



【表紙・挿絵イラスト】sunsunchild

目次

短歌の部……7
俳句の部……33
川柳の部……75

令和８年度やまと芸術祭文芸部門 実施概要

募集

- **募集期間** ：令和８年５月１日(金)～6 月 30 日(火) 必着
- **募集期間** ：短歌・俳句・川柳
- **テ ー マ** ：自由題
- **応募資格** ：市内に在住、在勤、在学の方及び市内で活動している方（令和８年４月１日現在 15 歳以上）
- **応募点数** ：1 部門につき、1 人 1 点
- **出品規定** ：過去１年以内に制作された未発表の作品

審査員

- **俳　　句** ：山田　吉郎
- **短　　歌** ：土生　依子
- **川　　柳** ：やまぐち　珠美

表彰式

- **日　　時** ： 11 月 3 日（祝）午後１時～
- **会　　場** ： 文化創造拠点シリウス サブホール

応募数

短歌	俳句	川柳	**計**
62	119	60	**241**

入賞数

	短歌	俳句	川柳	**計**
最優秀賞	1	1	1	**3**
優秀賞	2	2	2	**6**
秀作	5	11	5	**21**



短歌の部

― 全体講評 ―

今回の応募作は、自然詠や相聞歌、家族詠、挽歌、戦争や世相をうたった歌など、さまざまなモチーフのもとに詠まれた作がありました。それぞれかけがえのない体験や思い出、自然への感動などに基づいた作で、心惹かれ拝読しました。短歌は、そうした主題をどのようにうたうかという表現上の配慮が大切で、とくに五七五七七の歌の調べをどのようにととのえるかという点は重要です。内容と表現が適切に結びついたところに佳作が生まれます。そうした観点に重点を置きながら選をさせていただきました。生まれた命を見つめ見守る作には深い感動を覚えました。また、家族との絆や亡き人への思いを詠んだ作、若々しくナイーブな心情の流露が見られる作にも注目しました。応募作はそれぞれに大切な主題を秘めています。歌のリズムや表現に留意して推敲をしていただくとさらに心を打つ作品になると思います。

山田　吉郎

審査員作品

わかき日の霊峰阿夫利の雲の歌今なほ胸のつばさふるはす

審査員プロフィール

一九五四年、神奈川県生まれ。現代歌人協会会員、日本歌人クラブ南関東ブロック幹事、歌誌『ぷりずむ』選者。前田夕暮祭短歌大会選者を務める。鶴見大学名誉教授、博士（文学）。歌集に『蝶の記憶』『実朝塚の秋』『猫坂物語』『丹沢風日抄』（いずれも短歌研究社）、研究書に『前田夕暮研究―受容と創造―』（風間書房）ほかがある。一九九三年、前田夕暮研究により第一〇回岡崎義恵学術研究奨励賞。二〇二六年、『丹沢風日抄』により日本歌人クラブ南関東ブロック優良歌集賞。

最優秀賞

凍る夜鳴き声あげず子を産みし牛舎の「ハナ」に新藁を足す

遠藤 寛

― 講評 ―

寒さのつのる夜に出産した牛舎の雌牛への思いが深くこもっている作。下の句に牛舎での出産に立ち会う人の心情と情景が鮮明に浮かび上がってきます。

優秀賞

食材を背負って今日も来てくれる五分といない息子よおまえは

古館　敦子

― 講評 ―

毎日食材を届けてくれる息子に感謝しながらも、すぐに帰ってしまう息子の姿が彷彿とします。わが子への信頼の情がおのずと感じられる佳作です。

優秀賞

手を解くよちよち歩きの好奇心つばめ鳴く軒やがて遠のく

武藤　直樹

― 講評 ―

幼子が自らの好奇心にうながされて一人で歩き出す。そのいのちの息吹に充ちた姿を、つばめの鳴く家の風景を織り込みながらみごとにうたいあげています。

秀作

見上げると向日葵のよう応援にひと足先の夏を感じた

一柳碧

― 講評 ―

見上げると応援の人々の姿が目に映り、それが夏の向日葵のようであるという。季節感を取り入れた比喩が魅力的。さわやかな情感が流露する一首です。

物足らぬほどに寡黙な父逝きて語らぬ教へあるを今知る

詩

―講評―

生前の父を回想し、その寡黙なところに教えられるところがあったと作者は静かにうなずく。時の移ろいの中で父への思いの深さが伝わってくる作です。

赤子より寝不足息子気にかかる眠いイクメン新パパファイト

佐藤　幸江

―講評―

子の親となった息子へとエールを送る一首です。新しい命の誕生の喜びの中に寝不足気味の息子への気遣いが感じられます。下の句の励ましが印象的です。

眠れずに深夜便聞く傍らの妻は麗らのそ知らぬ寝顔

鈴木 雄三

― 講評 ―

深夜便を聞いている作者の心情が、傍らの妻の様子と対比させながら、印象深くうたわれています。下の句の明るいリズムと表現が一首を生かしています。

問いつめてまことしやかな優しげな嘘を貴方につかせてしまった

谷元 博樹

―講評―

二人の間の微妙な心理のやりとりがドラマのひとこまのように巧みにうたわれています。口語表現が生き生きと駆使されており、共感をさそう一首です。

その他の作品

最後まで離れたくない端の席輝く笑顔がたくさん見える

浅野　さくら

同日に傘寿の君と祝メール半世紀後の摩訶不思議かな

東　哲子

夫のするフェンスの修理有難く足元花壇めちゃくちゃに

足立　陸子

ご飯粒全部きれいに食べるから父のベル麻痺治してください

息　抵抗

アラームが目覚める前にモーニングいつもは要らないスープも飲もう

石飛　蒼空

いとし子の駆け寄る笑顔に迎えられ抱く喜び胸のさざ波

泉野　旭仙

春霞遠山かすむ夕暮れて母の面影胸によぎりぬ

入山　みお

サッカーも野球もそりゃあ好きだけどもっと映して戦争の翳

岩下　正文

柚子の葉を食べる幼虫殺せなくて君の未来を見てみたくなり

岡﨑　毬子

脚を組み満員電車の座席にてスマホ眺める熟女淑しく

貝塚　よしたか

翁草ふんわりわたげ旅立ちぬいづくの原で芽ぶけといのる

角田　節子

夏至の朝白粉花の露光り横たわる妻に紅を引く我

片山　恵梨

故里の苗木育てしポン柑に秋の実りの白き花咲く

加藤　和子

きかせてよ宇宙の旅のものがたり命をつなぐ谷戸の鴨らよ

加藤　洋子

救急車行くたび浮かぶ母の顔いつか現実覚悟して聴く

川中　紀行

山路には小さな花がそこかしこ足がおのずと花避け歩む

北村　明延

七夕をまたと願いし母の筆今なほ胸に短冊浮かぶ

小林　心響

祖母宅へ雪踏みつけて歩きだす夜の空港こころ弾んで

阪本　雅樹

絵の具を塗ってキャンバスを床に叩きつけた初めて友達ができた

佐藤　明星

進む道空も心も雲かかる悩める初夏は青春の証

新庄　サラ

百年の恋を捨てよと筆の旅辿りつきしは君想ふ歌

高木　泰彦

百余日共に過せし四人部屋海の蒼さに勝る思い出

高橋　敦子

不達葉書距離の重みを噛み締めてちっちに会いたい正月の郵便箱

髙橋　はるか

持ち帰る紙袋から焼きたてのたい焼きの尾が揺れる幸せ

田中　康子

喪失の気付く幸せ夢のミ現試練の対峙刻人の動き

地球の声

平年は葉月に咲けりホテイ草風待月に薄紫を付ける

永島　与昂

布哇から翌仲夏には負け戦争プロで三歳の情報操作

永島　匡

君が主黒白アヒル白柴と僕がお猿の桃太郎旅

永島　匡人

対となるカップのいつもひとつしか使はぬ乾杯に降る孤独

二界　友理子

倫敦に及ばぬまでも我が家のベランダ濡らし朝の霧

橋本　忠紀

しらゆりの野を駆け抜けて眠る娘の寝息ゆかしき白百合月夜

長谷部　誠一

一日を大事に生きる教えてくれたはがん細胞

働く細胞

わが庭も今年ばかりと老木は枝を落とせり鹿角のごと

早川　晴世

新緑の香り嬉しき境内に鳥もうかれて我を呼ぶかな

林田　孝一

箱の中羽音響かす夏の夜に土の日々経て胸熱くなる

久光　夕仙

サーモンや色とりどりの寿司並ぶ食卓囲むは猫の眼光

廣瀬　香里

あぜみちでペンペン草のやるせなさペンペンペンペンとなきおりし

星野　籌子

父かもとあと付くトンボ夏トンボ気配を感じ心おだやか

美紀

楽しげな声を重ねて思い描く来年の春同じ景色を

三沢　杏奈

デジカメでボタンを押して見る写真輝く思い出涙落ちる

水木　七瑞

母よ母召されし歳に我なりぬ笑顔の浮ぶ米寿の祝い

水野　昂子

命抱き世界の平和託しバトン継ぎ今という日を未来へ託す

宮川　真珠久

物価高リユースショップはしごして掘り出し物に出合い微笑む

村益　建太

水源地場所の記憶がよみがえる泉の森に名が変われども

森　勇一

邂逅に竹馬の友の余所余所し時の経過の空しさを知り

八木　せいじ

月よりの青いシャワーを浴びながら考え深く星をながめる

保田　昌弘

妻が死す元気印の妻が死す残され我れ如何に生きなん

山崎　正治

ヤンママに座席ゆずりて子も笑顔話はずんで車窓も光る

山田　さとみ

柿若葉かがやく五月父征きしパプアニューギニアは日本海に続く

山本　恭子

さくら貝いちまい見つけこの海辺おんなじ貝がもう一つある

柚奈

小四春敵機の狙い軒下へ逃れし命卆寿なりけり

吉川　美智子

初光に天使のつかい四世代ひ孫の幸せひとえに願う

吉田　幸一

紅葉を夕日にたぐへ眺むれば輝き放ち問ひしわが非を

吉見　章二

ふる里の茅葺の家見へし駅白きエプロン手を振る母わ

和田　サト子



俳句の部

― 全体講評 ―

この度はやまと芸術祭文芸部門俳句の部にご応募くださいましてありがとうございます。応募作品一一九句を通して、皆様が季語と共に日常を大切に暮らし、十七音に喜怒哀楽の思いや気づき、願いや祈りを載せて一句を完成させていることがよく伝わってきました。中には、季重なりや無季、文法的な間違いも散見しましたが、大方は俳句の約束を踏まえた良い作品でした。何句か分かち書きの句がありましたが、続けて書いていただきたいと思いました。又、ほとんどが現代仮名遣いの句でした。選句は説明や報告でなく、詩のある句、省略のきいた余情のある句、俳諧味のある句、景の切り取り方が見事な句、季語の選択が的確な句、名詞(体言)で勝負した引き締まった句など広く選ばせていただいたつもりです。皆様の益々のご健吟お祈り申し上げます。

土生　依子

審査員作品

金魚売さらりと隠す金魚の死

審査員プロフィール

一九五二年、東京生まれ。一九八七年、俳句結社「青芝」入会。一九九三年、青芝賞受賞
無鑑査同人。一九九八年、俳人協会会員。二〇〇〇年、第一句集『良夜』上梓。二〇一七年、村上鬼城賞佳作賞受賞。二〇二三年、「青芝」四代目主宰継承。現在㈱カルチャー講師。

最優秀賞

守宮居て八十路の母の宵つぱり

雅　美智子

― 講評 ―

守宮は家を守るといわれているように家をしっかり支えて来た八十路のお母様。頑張り屋のお母様を揶揄しつつ、元気でいてという子の愛が伝わります。

優秀賞

教室を抜ける海風更衣

安喰 護

― 講評 ―

海辺の中高生の教室。窓を大きく開けていると爽やかな風が通り抜けます。紺色から白いシャツに衣更えした生徒らの明るい未来が見えるようです。

優秀賞

かなかなや母の笑顔に二通り

中村　みき子

― 講評 ―

かなかなの哀愁を感じる声を聴いた時、ふと母の笑顔にも明るい笑顔と、寂し気な笑顔があるのだと気づいた作者。お母様への深い慈しみが感じられます。

秀作

春疾風箱根関所の責め道具

上野　勝昭

― 講評 ―

関所破りのために用意した責め道具。なんとしても通り抜けようという人の春疾風のような勢いと守る人の存在。歴史の一場面を垣間見せてくれました。

行く春や枕がわりの時刻表

沖山 茂

― 講評 ―

広辞苑を枕にする句は見たことがありますが、時刻表ははじめてです。行く春に置いていかれぬよう旅の夢でも見ていそうです。時を旅する旅人の夢。

胸に当て熱きコーヒー窓小雪

釜谷 徹男

― 講評 ―

日常の中でのさりげない仕種から詩を掬い取っています。缶コーヒーで胸を温めながら窓の小雪を眺めている人の内なる夢と寂し気な姿は一幅の絵画。

をんどりとめんどりと居て青田風

小西　さき江

― 講評 ―

をんどりとめんどりという伸びやかな言葉がなんとなくユーモラスです。鶏の声や動きまで感じられ、青田風が吹く田舎の風景が見えてきます。

菩提寺の竹の靴べら夏座敷

佐藤　ミイ

―講評―

さりげなく置いてある竹の靴べらに菩提寺の気遣いが感じられます。その先に広い畳の部屋があり、読経が聞こえてきそうな涼し気な一句です。

春隣とび跳ねながら母待つ子

高橋　眞也

― 講評 ―

春が来る喜びを体じゅうで感じながら母の帰りを待っている健気な子ども。とび跳ねている姿がいかにも可愛く、成長を見守る目が温かい一句です。

本物の孫の手丸し掘り炬燵

田中 亨

― 講評 ―

本物の孫の手という言い方が俳諧的でゆとりのようなものを感じます。掘り炬燵の中でふと触れたリアルな孫の手に対する愛情が深いです。

父の忌や四角四面の冷奴

古川　正幸

―講評―

慣用句やことわざを俳句に使うのはあまり好まないのですが、この句は今は亡きお父様の生真面目さとその生活を想像させる力のある句だと思いました。

不自由を厭はぬ強さ蝸牛

堀場　信久

―講評―

確かに蝸牛はいつも殻を背負っていますが、それを不自由を厭わない強さと想像したのが手柄。家など人間が背負う物のことも裏に表現しています。

思う事言わぬ癖つき盆の月

吉川　美智子

― 講評 ―

本心だけで生きられないのは少し寂しい気もしますが人間関係をよくする知恵とも言えましょう。盆の月は人の魂や営みをそっと包んで照らしています。

風花に松の古木の動かざる

吉見 章二

― 講評 ―

文語の助動詞を使った伝統俳句的な作品です。風花の落ちてくる青い空と白い雪、そして松の緑という色彩豊かな一句。動と静の対比のある清閑な世界。

その他の作品

ベビーカー児の足踊る桜道　藍

金婚の歩幅揃ひし月夜道　明吉　一幸

卒業のまた逢ふ夏に百日紅　浅野　さくら

天高し犬に声掛けVサイン　足立　陸子

黙とうの姿美し終戦忌　安齋　行夫

杖握る水無月の今朝雨しとど

伊沢　利保

連れていくハイドレンジア夏晴れへ

一柳　碧

雨戸引く手止めひととき風通す

伊藤　泰成

小春日やひらりひらりと手話の指

井本　一湘

グランドに審判講習夏きざす

岩下　正文

藍浴衣そっとうなじの髪あげる　内野　節子

我が影にアジサイ踏みし痛し影　大賀　英世

八重蕺草コロラトゥーラの滾りあり　おおもり　じゅん子

亡母の香の品分け合いて初時雨　岡﨑　毬子

あかね雲終の棲家はこの大和　岡　しげ子

更衣新たな一歩風吹けり

小沢　陽子

断捨離で辰己賀状梅雨の入り

貝塚　よしたか

ノカンゾウあすも一りん咲く気配

角田　節子

あじさいをめでたるちごのあたまかな

片山　恵梨

はらからも老いて母の忌春の寺

加藤　和子

短夜や卒寿の祝いＡＩと

加藤　滋

入学式うしろチラチラ足プラプラ

金丸　尚

いづかたも山霞みをり彦根城

河合　紘一

春舞台ドキドキソロの老人枠

河口　初幸

シベリアの日々語る父いない夏

川中　紀行

口きりりと勝ち抜く少女宮相撲

河村　笑

春の海ハートの貝が足を刺す

北村　明延

梅雨ぞらや寒さひとしおの我が家かな

釘宮　春子

人混みに父似の背中十二月

紅

高齢者講習済んで杜若

小須田　壽久

光ごと玉虫掬う母の手よ

小林　心響

好きすぎてあなたの心にオフサイド

小原　龍

風に乗り踊るサンバやつがひ蝶

坂野　光山

風がいい窓よりの風涼の風

相模乃　螢

故郷を離れ墓参も遠のきて

酒見　陽子

手をあわす葉がくれ梅の大きこと　貴家　香

里山の棚田に立ちて山笑う　佐藤　正一

六度目の端午の節句や乳歯煮る　塩田

甘水に蛍の群れの一夜日よ　紫音

今日も又どこに身を置く猛暑かな　志賀　久一

登り見て涼風なびく棚田かな　澁谷　毅

軒下に貼紙のあり燕の子　清水　正広

大空の青き鏡や運動会　志村　なを

朝方に雫のカーテン窓覆う　新庄　サラ

手袋をそっと脱ぐ手の赤い爪　杉山　洋子

広き空齢を重ね夏に入る　鈴木　眞理子

新緑や青帽黄帽鬼ごっこ　鈴木　雄三

冬ざれや送電塔の尾根唸る　鈴木　良一

秋のくれ黄色い空に富士の山　鈴木　莉玖斗

亡き友の思い出多き土筆刈り　清清　空空

散歩すりゃ月夜の下に平屋建て　高木　泰彦

匝瑳市と読んで漢の更衣　髙浪　國勝

リュック負ひし影の長かり夏の夕　髙橋　敦子

傘寿経て裸の宙へ妻還える　髙橋　克

紫陽花や迷う道にも雨上がる　髙橋　はるか

動物病院心配顔にコスモスゆれて

田崎　啓子

シャッター街木枯らしだけが戸を叩く

田中　康子

六月の水を愉しむ海驢かな

谷元　博樹

里山の青空泳ぐ百の鯉

千葉　幸子

願立ての磴を伏せゆく白日傘

角山　裕子

小窓より葉擦れを聞くや更衣　出来　典子

星まつり世界平和の願多し　外川　真澄

玉響の雪のいのちをてのひらに　栃木　郁子

体操のピアノ伴奏夏めきぬ　外山　美佳子

影最短長きを啜る心太　永島　与昂

原爆忌覇を競う世の驕り跡

永島　匡

白柴の毛替えを集めもう一頭

永島　匡人

ふらここやふたりっきりの時を漕ぎ

中谷　幸弘

子等の声水際に春来てゐたり

中浜　智枝

梅雨晴れの街に行き交うベビーカー

中村　文江

隧道を一気に抜ける夏燕

茄子の実の輝く肌に嫉妬する

立ち漕ぎの子等のにぎやか夏来る

新盆会遺影微笑むばかりなり

咲き分けのプライド守る瓜の花

中村　道子

新堀　次男

のあん

野澤　星彦

俳仁

盛夏のみ開く引き出しビッグバン

長谷部　誠一

歩き煙草の香よ君おもふ寒夜

華岡　紫陽

熊の地に民の平和よいつ来たる

林田　孝一

妻亡きてひとり菜を炊く老いの日々

原　忠司

夕焼や君の町まで色のびて

半藤　由美子

パクパクとエサか相手か白目高　久光　夕仙

さんぽ道髪を揺らすは青嵐　廣瀬　香里

隣人は自慢多しや木瓜の花　広瀬　洋子

強風にあおられ舞ふや座間の凧　廣田　昭博

殻を割き強さを纏う兜虫　藤井　健一

夏安居の軋む廊下や写経の間

古澤　秀昭

亡き夫や新酒と共に十三仏

古屋　啓子

先駆けはひこばえに咲く花一輪

星野　京子

あじさゐを見せ合ふ朝の介護バス

堀場　美知子

舟下るドナウは一つ星月夜

眞壁　繁子

紋白蝶脚にセンサーあるそうな

踏ん張つて雲に脚置くあめんぼう

一歩目で前髪死んだ梅雨の朝

梅雨の雨誰かの心に火灯す

富士を背にトンボロ歩き汗ぬぐう

間瀬　京子

松本　進

三沢　杏奈

水木　七瑞

水野　昂子

つまづいて古人学びし未来かな　森　重仁

梅雨晴間心までする甲羅干し　八木　せいじ

そよ風にあわい若葉がなでられる　保田　昌弘

ショパン弾くピアノに並ぶ雛人形　山下　敬市

輝いて風とたはむる花楓　山本　靖子

芝居跳ね日傘廻して帰る女　横山　しず子

うぐいすの初音おひろめ駅ホーム　吉川　あけみ

青春は波頭に光る五月かな　渡辺　利明

喉赤き鶯よ鳴け過疎の村　渡辺　洋一

逃げ水や追っても君の遠きこと　渡辺　郁子



川柳の部

― 全体講評 ―

コロナ禍の余波も薄れ、皆さまから自由闊達な句が寄せられて大変うれしく一句一句に向き合いました。内容は日常の一コマをはじめとして、ＡＩ・ロボット・サッカーワールドカップ・政治動向などバラエティーに富んでいました。さて、全体として気づきましたことをお伝えします。一句をお作りになるときに、この句には「読んでくれる人がいる」というお気持ちを大切にしていただけましたら、きっとその句は大きく広がりをもつことと思います。そして、「わたしはここに居ます」と句で読者に伝えてみてください。句の向こうにいる読者と、気持ちのキャッチボールができるかもしれません。川柳は、そんな文芸です。指を折り折り五・七・五、リズムを大事に人間を詠んでみてくだされば、うれしいことこの上ありません。お気軽に、毎日、川柳をどうぞ。

やまぐち　珠美

審査員作品

手をつなぐまほろば橋の真ん中で

審査員プロフィール

海老名市川柳協会会長。海老名川柳天馬代表。神奈川県川柳協会会員。海老名市生涯学習、綾瀬市生涯学習・青少年健全育成会にて川柳講座を開講。二〇一七年から二〇二四年までよみうりカルチャー横浜講師。二〇一九年からよみうりカルチャー北千住講師。合同句集『神奈川　川柳作家名鑑』。

最優秀賞

かぜの子を気にしパートのくつを履く

大宮　啓子

― 講評 ―

働くお父さんお母さんの想いの深さが表されました。やはり「くつを履」いて出勤しなければならない、切ない親の姿が胸に迫ってきます。

優秀賞

主治医から余命チャージをされて吉

安部　典子

― 講評 ―

うれしさが鮮やかに描かれました。「チャージをされて」に安堵感があふれています。読者もうれしくなる一句です。お体を大切に。

優秀賞

逆あがり四十の母の悪あがき

片山　恵梨

― 講評 ―

きっかけは何であれ「逆あがり」に挑む「母」の景にガンバレの応援がまた来ることでしょう。句にファイトをもらいました。

秀作

定年へ労いの膳かこむ幸

安藤　美佐子

― 講評 ―

お仕事を全うされた作者へ、家族や友人が「労い」の宴に笑顔で集います。下五の至福を、読者にも分けてくれる一句です。

ロボットも税金払う近未来

上見　大和

―講評―

世相へユーモアをもって切り込みました。上の句「も」が、中の句「税金払う」を受け止めて光ります。文芸としての川柳の持ち味があります。

夢枕そっと顔出す母の顔

長田 隆廣

― 講評 ―

中の句の「顔」は姿、「母の顔」は表情を表しています。その夢は甘やかでちょっと寂しかったことでしょう。「そっと」のたたずまいが、しみます。

あさつぼみひるに花さくよる実る

清瀬　一枝

―講評―

ひらがなが句のやわらかな詩情へ読者を誘います。花の実りは、さながら人の一生のようでもあります。作者の花がこの句に結実しました。

注文にスマホは酷で店を出る

山田 明彦

― 講評 ―

この場面へうなずく方も多いことでしょう。飲食店のシステムの変容へ「酷」の一語を呑みこむ苦さが、一句からほとばしっています。

その他の作品

裏山の相鉄線は無事かいな　　足立　公子

とぼとぼと歩調合せる散歩犬　　足立　陸子

寂しいよ忘れる頭薬なし　　稲益　喜代子

儘ならぬものに血圧物価高　　岩下　正文

どくだみのほくそ笑みつつ基地となる　　おおもり　じゅん子

国会もＡＩ同士が論戦す

角田　節子

九十では迷路だ我家へ帰る路

化石庵頓珍

育てられ育て身に沁む親心

加藤　和子

福投げて汗だく関取服着ない

釜谷　徹男

こらしめたはずの家内に頭下げ

北村　明延

巷から政治不信の稲光

きっき

ガザの子へアンパン平和プレゼント

小糸 藍子

新妻の愚痴に惚気とめくばせる

小須田 壽久

息詰まるシュート応酬窓白む

小林 心響

小谷野ツヤひまわりの郷歌唄う

小谷野 ツヤ

かみさんの意向に沿えば来る平和

斉藤　一歩

人よりもＡＩ過信自殺する

坂野　光山

八咫烏頂目指し今日も翔ぶ

佐久間　厚

匿流は絶対ダメと泣き叫ぶ

佐藤　正一

ポニーテール跳ねる青春の通学路

佐藤　徳栄

覚悟した玄関を出ての忘れ傘

新藤　誠一郎

生易しい事では無いと知る介護

鈴木　昭子

わが父がつめ切りせがんだ年になり

鈴木　澄子

深夜便隣り天国妻麗ら

鈴木　雄三

サッカーにうつつを抜かし国とられ

清清　空空

オレオレと祖母にかけたら警察が

高木　泰彦

半額のシールを選ぶ夢を見て

高橋　敦子

近未来ロボットだけの川柳会

竹岡　美恵

ドクターヘパソコン見ずに私診て

田中　康子

短夜や夫の寝ぼけて鼻歌を

出来　典子

失敗を何度でも楽しむ贅沢

永島　与昂

摩訶不思議防衛戦は非戦争？

永島　匡

白き犬黒白家鴨と並び立つ

永島　匡人

もうすぐは百万年の大宇宙

中谷　幸弘

百歳を目前にひかえ今日も快適

新村　笑子

米尽きてジジババだけの城落ちる

橋本　忠紀

夫捨てて打ち首にせし半世紀

長谷部　誠一

桜見来て足元見ずにころぶ人

林田　孝一

年重ね重なることはしわばかり

原　逸子

祖父と孫コマ地図たどる夏の未知

久光　夕仙

手本とすなほポジティブな卒寿越え　　ひだ　まり子

定年後新たな出会い玉手箱　　平澤　泰作

あれあれとあれの一言意味通ず　　平澤　美保

ワクワクと三万日と君とゆく　　藤本　清栄

犬しっぽふさふさ残しまる坊主　　水野　昂子

ワンワン！と指差す先はカンガルー

武藤　直樹

雨だけど農家にとっていい天気

村井　英雄

テレビから今日も聞こえる「めちゃうまい」

村益　建太

クラス会主役を競う持病数

村山　武

外出着まで予報士に指図され

八木　せいじ

デザートにトマトを出されとまどった

保田　昌弘

底のない鍋の転がる野分かな

渡辺　洋一

令和８年度やまと芸術祭文芸部門作品集

令和８年 10 月１日発行

大和市文化振興課文化振興係

〒242-8601

大和市下鶴間１丁目１番１号

ＴＥＬ：046-260-5222

ＦＡＸ：046-263-2080